

ケルムスコット・プレス版  
ウィリアム・モリス著 『イアソンの生と死』

Morris, William. The life and death of Jason. Hammersmith (London), Kelmscott Press, 1895 (K931.6-M)

図書館司書二課（課長補佐）小野 恵子

イギリスの19世紀後半においてウィリアム・モリス (William Morris, 1834-1896) は、詩人、装飾芸術家、社会主義運動家、商会経営から出版業のプロデューサーと多様な才能を發揮し、生涯、生真面目に生活の美の復権を唱え続けた。オックスフォード大学で共に神学を修めた画家のバーン＝ジョーンズ (Edward Burn-Jones, 1833-1898) は常に協力し合う盟友であった。彼らはラスキンの思想に触れ、とりわけゴシック建築への関心を深めた。ラファエル前派の芸術家達と交流しながら、同人誌『オックスフォード・アンド・ケンブリッジ・マガジン』(1856)を1年間刊行し、処女詩集『グウィネヴィアの弁明、その他の詩』(1858)をロセッティに捧げた。モリス自身は詩人として有名で、1877年オックスフォード大学の詩学教授に、1892年ヴィクトリア朝を代表する詩人テニスンの後継として桂冠詩人に選出されたが、いずれ

も辞退している。

19世紀後半から20世紀初頭にかけてイギリスでは数多くのプライベート・プレス(私家版印刷工房)が設立された。モリスはその先駆的存在であり、活字印刷家であったエメリー・ウオーカーの知遇を得て、1891年ハマスミスの自宅近くにケルムスコット・プレスを創設、1898年に閉鎖されるまでの約8年間に53点の美しい書物を限定刊行した。中でもモリスの死の5ヶ月前に完成した『チヨースー作品集 (The works of Geoffrey Chaucer)』(1896)は世界3大美書の1つに数えられている。

モリスの第2詩集である本書の初版(1867.1)はベル・アンド・ダルディ社(チジック・プレス印刷)から自費で500部出版され、以後5年間で7版を重ねた。概要の部分は2版(1867.12)から加えられ、3版(1868)と8版(1882)の改訂で若干訂正された。8版を底本にしたこの刊本でもさらに手が増えられている。

本書は、ギリシア神話から題材を採ったもので、金の羊毛の探索と、イアソンとメディアとの話を主題としている。作品全体の概要は冒頭でこう述べられている。「梗概ーイオルコスの王、アイソンの息子、イアソンはペリアスの領地にやってきて、ペリアスが不当に統治しているイアソンの父親の王国を返すよう要求した。しかし、ペリアスはイアソンに、プリクソスがコルクスへ連れて行った金の羊毛を持ち帰ることが出来たら、領地は返そうと言った。

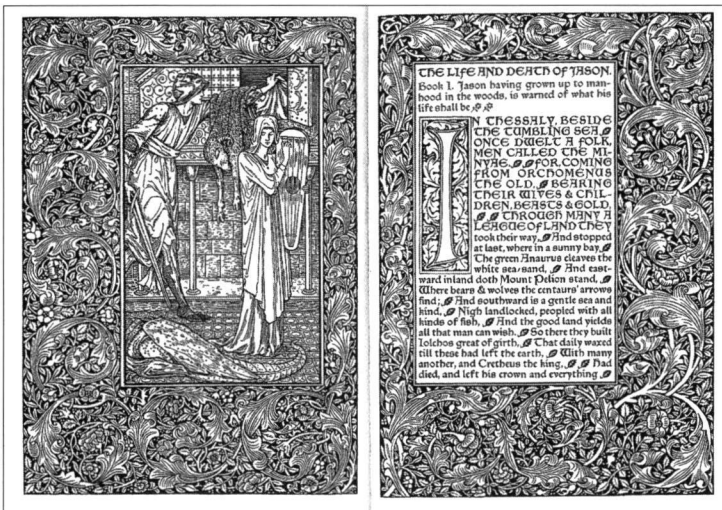


図1 左：口絵[魔法使いメディアの助けによって金の羊毛を手に入れたイアソン、下には眠りに落ちた竜がいる]

そこでイアソンは他の勇士達とアルゴ号でコルキスへ向かい、コルキス王の娘メディアの助けによって、金の羊毛を手に入れるとともに、メディアも連れ去った。多くの困難の後、イアソン達はイオルコスに再び戻った。そこで、メディアの企みによりペリアスは殺される。しかし、イアソンはメディアとともにコリントスに移り住み、メディアと幸せに暮らした。しばらくして、イアソンはコリントス王の娘グラウケーの愛に心奪われ、結婚しなければならなくなった。するとメディアはグラウケーを殺し、イアソンの怪死のすぐ後、アテネのアイゲウスのもとに逃げ去った。』

本文は、長い物語詩からなる17の詩篇で構成され、当初は物語詩の連作『地上楽園 (The earthly paradise)』(1868-1870)に「イアソンの偉業 (The deeds of Jason)」として収めるつもりだった。しかしあまりに長編となったため最初の1篇を現在の題で先行出版した。この詩集は好評を博し、モリスは続いて出版された『地上楽園』により詩人として名声を確かなものにした。

本書はケルムスコット・プレスから第34番目に刊行された手漉紙刷200部（このほかヴェラム刷6部）の1冊で、5ギニーで販売された。

判型は大型4折本（28.8cm）、総ヴェラム（高級羊皮紙）薄表紙装を3本の茶褐色の絹織紐で前小口を結ぶ方法を取り、背に金箔押しの書名を配している。用紙はケント州バチュラー社が亜麻を使って漉いたパーチ紙（淡水魚の透かし模様）を



Sold by William Morris at the Kelmiscott Press.

図2 3種のうち大判本に用いられた葉模様地の印刷者マーク (9×13.5cm)

用い、インクにも細心の注意が払われ、アルピオンの手引き印刷機で印刷、製本はロンドンのレイトン社に委託された。

モリスは見開き2ページを1単位（図1）とするレイアウトの美しさを追求した。のど空きを狭くし、天、小口、地、の順に版面の余白を広くしていく独自の紙面構成で中世的な世界を作り出そうとした。活字書体はモリス自身が考案した2書体3種の活字のうち、ゴシック体のトロイ活字（現在の18ポイントに相当）が用いられた。名称はこの活字を最初に印刷した『トロイ戦史抄』（1892）に因んでいる。

扉（口絵）と巻末にある清楚で美しい小口木版挿絵の2枚は、バーン=ジョーンズの鉛筆書きの原画をインクで描き直し版木に転写されたものをW・シュピールマイヤーが彫刻する工程を経て制作された。装飾文様はモリスによる有機的な植物模様が使われており、縁飾枠とイニシャル頭文字は黒地に白の線で表されている。また、縁飾りや改行箇所を示す小さな木の葉や小花のパラグラフマーク（段標）がバランスよく配置されている。

刷色は黒と朱の2色刷で、各詩篇の書き出しと肩番号（Book I～BookXVII）、傍注が付された部分を朱刷にしている。頁付（353頁）は見開き版面左下と右下に、折丁記号は右版面左下にある。

結びの頁、コロフォン（奥付）には書名、著者名、印刷年月日（1895年5月25日完了）等の記載と印刷者の紋章（図2）が印刷されている。

表見返しにはエクスリプリス（蔵書票）が貼付され、印刷作業に従事する3人の職人の図版（8.5×11cm）には、Charlus Downer Hazen<sup>1)</sup>と名前が記されている。

本書の特装本は、ダウス製本工房で仕立てられ1904年に刊行された。

1) 『American authors and books』 Crown Publishers [1972] p.287 に同名（1868-1941）の記載があり、ロンドン北部自治区出身の教育者、歴史学者とある。